

(体育科)

## 「共に学ぶ楽しさ・できる喜びを味わえる授業の創造」

### ～ボール運動・ボールゲームを通して～

大阪市立中浜小学校 藤松 早苗 木野 万登香 金子 俊彦

#### 1. 研究主題設定の理由

昨年度の全国体力・運動能力、運動習慣調査では、50m走、反復横とび、握力で全国平均・大阪市平均から大きく下回っており、基礎体力が高い児童と低い児童との差が大きい特徴が見られた。いっぽう、自分の体力に自信がある児童が少なかったり、家の人から運動やスポーツを積極的に行うことを勧められる児童が少なかったりする割には、「運動（体を動かす遊びを含む）やスポーツすることは好きですか」についての肯定的回答が、男女ともに全国平均・大阪市平均よりも非常に高いという結果が見られた。また、健康でいるためには運動が大切だと考える児童も全国平均・大阪市平均に比べるととても多く、運動やスポーツに対する興味・関心は高い。これらは、運動の苦手な児童も楽しみながら体育科を学習してきた本校の取り組みに起因していると考えられる。よって、これまでの児童に効果的な取り組みを継続しつつ、基礎体力を高める運動を計画的に取り入れながら改善していく必要があると考え、研究主題を設定した。

#### 2. 研究の趣旨

これまで本校が培ってきた友だちとの関わりを盛んにする取り組みを活かし、運動を苦手とする児童が運動嫌いにならないような生涯学習の視点を見据えながら、体育科の研究に取り組んでいくことを基盤に据える。そして、仲間と運動することや新しい技へ挑戦すること、チームどうして競い合うことの喜びを十分に感得させるために、ボール運動・ボールゲームを通しての研究を進めることとした。

また、友だちとの関わりを盛んにしながら進めていくが、それと同時に児童の運動能力も伸ばす必要がある。そのため、学校生活の中で運動を身近に感じ、いつでも友だちと体を動かせる環境を充実させる。さらに、本校の特徴であるたてわり班での異学年交流でも積極的に運動することを取り入れて活用を図ることが効果的である。

#### 3. 研究の概要

体力の向上を図るためには、運動することの楽しさや喜びを味わわせ、生涯にわたって運動に親しむことができるような児童を育てることが大切である。児童が運動に楽しさや魅力を感じられないと効果的ではないので、この楽しさを体育学習でしっかり追究しなければならない。

体育学習における「楽しい」とは「体を動かす楽しさ」「うまくなる楽しさ」「わかる楽しさ」「考える楽しさ」「工夫する楽しさ」「協力する楽しさ」が挙げられ、児童の発達段階に応じて楽しさの追究の仕方は変化してくる。例えば、低学年では「体をも

っと動かしたい」「こんなこともしてみたい」という欲求を満たすことが、楽しさにつながると考えられる。しかし、高学年になるにつれて、自分の課題をもち、そこへ向けて練習を工夫したり、上達した時に楽しさを感じたりすると考えられる。さらに、仲間と認め合ったり、教え合ったりしながら、学習を展開していくことで、成就感や達成感をより味わえるようにすることも大切である。

友だちと関わり合いながら無理なく、楽しく運動することを通して、児童の基礎体力が向上するように指導し、以下の3つの視点をもって研究を進めることとする。

#### < 技能 >

##### ① 楽しく活動できる指導法の工夫

- ・動く楽しさや運動性にふれることができる活動の設定
- ・運動が苦手な児童への指導者の支援の仕方

#### < 思考・判断 >

##### ② 運動の課題や場づくりの工夫

- ・基礎体力が向上する工夫
- ・めあて（課題）の持たせ方や学習カードの工夫
- ・主体的に課題を解決することができる場の工夫

#### < 態度 >

##### ③ 仲間との豊かな関わり方の工夫

- ・体育学習におけるコミュニケーション能力を高める
- ・仲間との関わり合い方

## 4. 研究の成果と今後の課題

### (1) 研究の成果

- 体育学習のなかで友だちとの関わりを増やす工夫をしたことで、「協力」「話し合い」「認め合い」の活動が増え、仲間意識が深まった。
- 自分ができることを友だちへ教えることによって、児童自身の自信につながった。
- 児童の学び合う場を積極的に設定したことで、児童どうしで上手に伝え合う力が身についてきた。
- 運動能力を高めるための環境整備を手づくりで進めたことで、児童が積極的に運動する素地を育むことができた。

### (2) 今後の課題

- 児童の実態に応じた学習指導計画は作成できたので、系統性をもたせることでさらに効果的にする。
- 体育学習で培った児童の関わり合い、学び合いを他の教科学習へとつなげ、深い学びへ深化させる。